

蟬

志村 良知

階段は降りる方がお尻や腿の筋肉の運動になると聞いて、荷物が無く手が空いている時は外階段を使うようにしている。新聞を取りに行くのが朝一番の運動になる。気が向くと登りも階段を使う。八階まで百十三段、一階と二階の間は一段多い。一段の高さは一九センチ、八階の床面まで標高差二十二メートル。

真夏になって階段に頻繁に蟬が転がっている。アブラゼミが多く、ミンミンも混じる。先日は百十三段の間に四匹いた。二匹は触ると声と共に爆発的に飛ぶ例のパターンだったが、二匹は亡骸だった。

時々翅しか残っていないバラバラ死体を見かける。猫の仕業かと思っただが、マンションに外猫はいないので、犯人はカラスであろう。

静岡県の裾野にある旧居は前身の地目は原野で自然豊か、季節には蟬がものすごい。最近は横浜でもクマゼミが珍しくないが、ここは昔からクマゼミとアブラゼミの混在地域だった。朝晩はヒグラシ（カナカナ）、午前中はクマゼミ、真昼の休憩（静寂）を挟んで午後はアブラゼミと終日やかましい。入社間もないころ沼津勤務になった夏、初めて聞くクマゼミの喧しさに驚いた。オイル・ショックの狂乱物価と渡

哲也の『くちなしの花』の夏だった。

子供の頃、蟬は遊び相手ではなく「無視」だった。探すまでもなくその辺にいくらでもいて、飛び方も姿も不格好、素手でも捕まえられ、掴んでも刺されたり噛みつかれたりするスリルもない、齧っても美味くなさそう、と田舎の子供が珍重する理由が全く無い。

さて、蟬地雷というのをご存知だろうか、道端に蟬が仰向けに転がっている。微動だにしない。散歩中の犬が「わつと わんだ？」と興味を持つ。猫なら前足で様子見であるが、そこは犬の哀しさ、鼻面を近づける。鼻先が触れるか触れないかの至近距離で突然の大音響と翅の爆風が顔面を襲う。蟬慣れしていない犬にとってこれは地雷の爆発に等しい。トラウマになって道端に落ちている物を極度に怖がるようになる犬もいるという。